

エンゲージメント

第 3 章

Kumari



第2章 あらすじ

〈第2章 あらすじ〉

ローザの生い立ちは決して平穏なものではなかった。

海外医療ボランティアとして戦地に出向いていた医師、佐伯創一郎と、その戦地で孤児達の救済にあたっていたテレザ・ドリーは自然の流れに従い、愛し合った。そのふたりのあいだに出来た子供がローザである。

だが、二つの国の血を引くローザの命が宿った頃、二人の母国は、敵対国、とお互いを呼び合い殺戮の争いが始まり、両親は結ばれぬまま離れ離れになった。

敵対国の血を引くローザに待ち受けていたものは壮絶な虐めだった。母子ともに世間の冷たい仕打ちに耐えてきたが、いつしかローザは家から出ることもできなくなっていた。

その後、母親とローザは逃げるようにマウイ島にやって来たのだった。

マウイ島での生活も決して楽なものではなかったが、それでも穏やかに月日は流れていった。今まで口をつぐんできた佐伯創一郎のことも、母親はローザによく話し聞かせてくれるようになっていた。

月日は流れ、ローザの二十二歳の誕生日を目前に控えた頃、母親は佐伯創一郎との再会を願い、ローザと日本を訪れる計画を立てていた。

しかし母親は、ローザの二十二歳の誕生日を目前に他界してしまったのである。

当時、天涯孤独の身となったローザは精神的に不安定な日々を送っていたが、ある朝、彼女は海辺で尊い声を聞いた。

その日からローザはその声と共に生き、長い年月をひとりマウイ島で暮らしているのだった。

第 3 章

日本に行くことが出来たら、あなたの生存を信じ、あなたが私に話して下さった、
「きめ じま祈女島」という島にある小さな病院を訪ねてみようと思います。

しかし、こればかりは神のお導きに任せるほか私にはどうすることも出来ません。

あなたの母国である日本へ行けることも、そこであなたに出会えることも。』

一九xx年xx月xx日
テレーザ・ドリー

* * *

三枚に渡って書き綴られた母親の手紙を、ローザは久しぶりに読み返していた。

あなたに出会えることも、と最後に書かれている文字の後には母親が亡くなった日の、八日前の日付が記されている。

丁寧に折り畳まれた便箋の折り目は所々破れてしまっていた。色褪せたその手紙は相手に届けられることもなく、四十年以上ものあいだ開かれては折り畳まれ、また開かれるの繰り返しであった。その「サエキ ソウイチロウ」に宛てた母親の手紙をどれほどローザは読み返してきたことだろう。

便箋を静かに折り畳むとローザはガラスのポットに目を向けた。ハイビスカスのハーブティーは完全に出来上がりポットの中は深紅の色に染まっていた。ハーブティーに少しの蜂蜜を加え、それを気密性の高いステンレスのポットに注ぐと、手籠の中に入れてローザはいつものように夜明け前の砂浜に出掛けて行った。

数百メートル歩いた所で一人の男性の姿がローザの目に止まった。彼は数日前に見かけたブロンズヘアの男で、ローザが歩み寄っても気付くことなくベンチの上で俯いていた。

「どうぞ…」

ローザは紙コップに注いだハイビスカスのハーブティーを差し出しながら、男に声をかけた。

男は誰かと勘違いをしたのか、

「ミ・キ・コ？」

そう言って、驚きを隠せない表情で顔を上げた。

男の年齢は二十代後半から三十代前半に見えた。ウェーブのかかったブロンズヘアが柔らかく風に靡いている。気取りのない表情の、どこか助けを求めているような暗いブルーの瞳にローザは見つめられている。ローザを見て人違いだとわかると男は静かに息を吐き出し、肩を落とした。着こなされた白のTシャツとジーンズ姿はバカンスを楽しむためにマウイ島にいる様子には見えないが、それでも何か大きな使命を背負って彼はこの地にいるようにもローザには感じ取れた。

「少し酸味があるけど、よろしかったら」

ローザはハイビスカスのハーブティーを男の目の前に差し出した。

彼はじっとローザを見つめたままではいる。その目は少し充血しており、彼が深い眠りを取れずにいることは見てとれた。体の線も細く病み上がりのようにも感じられる。どこか体の具合でも悪くして静養に来ているのだろうかとも思ったが、ローザはそのことには触れなかった。ローザからハーブティーを受け取ろうとした男の手はやけに震えていた。

ローザは余命を宣告された今、ヒーラーとしての能力を封印しようとしていたが、男はローザの助けを必要としているようだった。それでも彼女はあえてベンチに腰を下ろすことはせず、会話も求めずにそのまま軽い会釈をした。

「もう少しで、陽が昇りますね」

そう声をかけ、男の前を立ち去った。

しかし、そのあいだも男の視線は痛いほどローザの背中に突き刺さっていた。
(わたくしに助けを求めなくても全ての人は神に守られています。夜が明け、太陽の光りが差し込めば神の力によって、その深い^{あい}藍の瞳も澄んだブルーに変わることでしょう)

ローザは砂の上を歩きながら、背中に感じる男の想いに優しくそう答えていた。

＊

＊

「僕はミシェル・フローレンといいます。フランス人です」

海辺のベンチに座る男に、ローザが声を掛けた日から二日が過ぎていた。その日、彼はローザに自分の名前を名乗った。

「僕のことはミシェルと呼んで下さい」

「わたくしのことはローザと呼んで下さい」

普段、ローザに話し掛けてくる人達のような明るい会話はなかったが、それでもローザが来るのを待っているかのよう
に、この数日、ミシェルは夜明け前の砂浜のベンチに座っていた。

「昔、僕は画家でした」

その日の明け方、またひとつ彼は自分のことをローザに話した。

やはりそうでしたか…とローザは胸の中で呟いた。初めてミシェルの姿を見た日、直ぐ近くに建つ別荘の住人かもしれないと、ローザはそう思いながら彼のことを見ていたからである。別荘は海辺に似合う白い建物で、オーナーはフランス人画家であると聞いていた。窓は深いブラウンの木枠に囲まれていて、その窓枠の色に合わせたような広々としたウッドデッキのテラスが印象的である。以前、そのテラスで黒髪の女性が座しているところをローザは見かけていた。

「画家で・し・た？」

ローザは、年齢的には十分に若い彼が、なぜに、画家でした、と過去形で答えなければならないのか不思議に思った。

ミシェルはその理由は答えなかったが、（もう、昔の話です）と、彼は胸の中で呟いた。しかし、その声はしっかりローザに届いていた。

そしてその時だった、ふいにローザの中に太い声が降りてきたのである。

『ワタシを描きなさいと、あなたの口から彼にそう伝えてあげてほしい。そのひと言で彼は目覚めるであろう。そのひと言で彼はワタシとのヤクソクを思い出すであろう』

明け方の海辺で、ワタシ、という声を感じると、もうすぐ朝陽が昇りはじめることをローザは知っている。彼女は何も喋らずにいるミシェルの隣で目を閉じ、癌によって余命を宣告されたこの時期に、なぜに悲しみに打ちひしがれている男性が自分の夢の中に現れ、そして今、体を震わせているフランス人画家の隣に自分は座しているのか、冷静に考えてみようとした。

そんな想いの中でローザはいつものごとく眠りにおち、夢を見た。

それは不思議な夢だった。この状況はわたくしに何を伝えようとしているのだろうかと思いながら、目の前の人達の話し声にローザは耳を傾けていた。だが、急に水の中に沈んでいくような息苦しさを覚え、彼女は大きな呼吸を繰り返した。

「安らかに眠らせてあげようと思ったが、あなたが悩んでいるようなので、夢を見させてあげたのだよ…」

またローザの耳元で太く穏やかな声が囁き始めたのである。すると、すぐにミシェルの声が聞こえた。

「ローザ、ローザ」

ローザは目を覚ました。

「静かに眠らせておいてあげようと思ったのですが、ローザが苦しそうなので…」

夢の中でローザが聞いていた言葉を復唱するように、ミシエルは言った。目の前の海原は朝陽に染まっていた。ミシエルの心配そうな目がローザに向けられている。 「ローザ、どうかしましたか？」

「わたくし、つい気持ちがよくて眠ってしまったようですね」

「すみません、起こしてしまって」

「そんなことないわ。起こして頂いてちょうどよかった、水の中に沈んでいくところでしたから」

「水？」

「ええ」

静かにのんびりとした口調でローザは答えた。

今ひとつ意味不明な彼女の話にもミシエルは笑い出すことはなかった。元々口数の少ない人ではあるが、それが逆に彼の暖かさを感じさせていた。

無理に会話を求めようとしない二人の間にマウイの波音は心地よく響いていた。

今しがた、ローザが夢の中で連れて行かれた場所は小さな船の上であった。

船の上には美しいブロンズヘアの三十代くらいの男女と、十才位の男の子が背中を向けて立っていた。ローザは彼らを上から見下ろすように眺めていた。大切な人でも亡くなったのか、彼らの足元には真っ白な布にくるまれた、人の亡骸のようなものが置かれていた。その三人の顔をよく見ようとした時、ローザの体は白い布の中に吸い込まれていくように目の前は何も見えなくなり、真っ白な視界が広がった。それでも船の上にいる彼らの声は鮮明に聞こえ、男の子は泣き叫び、嗚咽を漏らしていた。「お姉さんはどこにも行かないよね、僕の前から突然いなくなったりしないよね」と、男の子は傍にいる女性に言った。お姉さんと呼ばれた女性は、「私なら大丈夫よ」と、男の子にそう答えていた。

「私はずっとあなたの傍にいる、あなたを置いてどこにもいかない、約束するわ」と。
彼らの話し声に耳を傾けていたローザは、この時、名前も顔もわからぬその女性に対して言い知れぬ想いを抱いた。そして女性の無事を神に祈り続けたのである。

（神よ。ここにいる女性は守るべき人が沢山おります。どうか、どうか、この女性をお守り下さい…）

船のデッキを揺らす波の揺れが穏やかになると、今度は聞き覚えのある男性の声が聞こえてきた。
「生前、彼女がよく話していた、美しい海と、神の宿る島に辿りつけるよう、その場所で彼女の魂が生まれ変われるよう、三人で祈りを捧げよう」

その男の声は、最近になって頻繁にローザの夢に出て来る男性の声とよく似ていた。
しかし声の主たちのことを考える暇もなくローザの体はゆっくりと持ちあげられ、そのあとは体が急に下降し、水圧のようなもので耳が塞がれる感覚があった。そして傍にいた者達の声は何も聞こえなくなった。

だが、それらの声とは別に違う声が響いた。
「安らかに眠らせてあげようと思ったが、あなたが悩んでいるようなので夢を見させてあげたのだよ。彼を、彼らを、シンの光りの中へ導いてあげなさい…」

ミシェルに起こされて現実に戻されてからも、ローザはしばらくその場所から動こうとはしなかった。
ミシエルのほうも海辺に出てきた人達を無言で眺めていた。

「ミシェル、わたくし今ね、船に乗っている夢を見ていたわ」

「船？」

「ええ、とても不思議な夢を見ていました。ほんの数分、眠っていた感じだけど朝になってしまったのね」

「……」

「ミシェル、あなたに一つだけ訊いてもいいかしら」

ローザは朝陽に目を向けたまま、静かに話していく。

ミシェルは黙ってローザに目を向けた。

「あなたに初めてお会いした日、わたくしのことを、ミ・キ・コって呼んだでしょう？ 覚えている？」

「……」

「その女性^{ひと}はあなたの奥様？ それとも恋人？」

「……」

ミシェルはローザの問いかけに頷くことも首を横に振ることもなかった。ローザの口からミキコという名前が出ると、心なしか彼の表情は沈んだ。

この時ローザは、何も答えずに遠い目をしているミシェルを見て、ミキコという女性の話に触れるべきではなかったかも知れないと思った。長い沈黙が続いている。今まで静かに響いていた波音がやけに大きく聞こえ始めた。

「ごめんなさいね、余計なことを訊いてしまったわ」

ローザは軽く微笑んでベンチから立ち上がろうとした。だが、立ち上がろうとしてベンチに手をついた時、
「ミキコは、僕の妻でも恋人でもありません」

ミシェルは小さな声でそう答えたのである。

そのあと彼は独り言を呟くように、自分の真実を話しはじめた。そして彼は最後にこう言った。

「ミキコは日本の女性です。僕の親友の恋人でした」

＊

＊

神の仕事が出来るなどたやすく思うなど、止むことのない指の震えはミシェルをあざ笑っているかのようであった。すでに深夜の二時を回っていた。今朝方、自分の真実を偽りなくローザに話してしまったことを彼は悔やんでいた。いや、それ以上に会ったばかりの他人に自分の真実を話すことなど今までありえなかった、なのにどうして…。そう思うと彼は自分自身に腹が立って仕方なかった。

朝の海辺で、ローザは顔色ひとつ変えずにミシエルの話に耳を傾けていた。そして彼女は話を聞き終えたあと彼にこう告げたのである。

「ミシェル、目の前のマウイの太陽を、あの光を、出来るだけ多くの人に見せてあげなさい。それが、あなたに託された神の仕事です」

とても穏やかな声だった。何かの見えぬ力にでも操られているかのように、その時のローザは朝陽を見つめ淡々とミシエルにそう言った。

ミシエルは今まで「神」という言葉を真剣に受け入れたことはなかったが、昇ったばかりの太陽を見た時、もしかしたら描けるのではないかと、強い想いが湧き上がった。だが、現実はその甘くはなく、アルコール漬けで麻痺した手は思うようには動かなかった。

数ヵ月前、新崎^{しんざき}美希子^{みきこ}という女性を連れてこのマウイ島に来た時、彼は生きる希望などまるでなかった。美希子の細い腕に青アザが出来るほど強く握りしめては「俺を殺してくれ」と何度も言ってきた。再起不能になればいいと、震える手を何度も壁にぶつけてきた。この地でのたれ死ぬことが自分には一番似合っている…そう思ってミシエルはこのマウイ島にやって来たのである。

「今になって何がマウイの太陽だ。ふざけるな！」

自分の意に反して震える手が憎らしくてたまらない。この腕さえしっかりしていてくれたらと、そう思えば思うほどミシエルは何もかもが嫌になった。

この時、ふいに一筋の光が彼の目を刺激した。

その光は、床に散乱している数本の酒瓶から放たれていた。瓶は部屋の明かりに反射し、光線のようになって輝いている。彼はすかさずその酒瓶を手を取った。すぐるように瓶の中を覗き込んで見たが、中には一滴たりともアルコールは入っていない。部屋の明かりに晒して見ても深いグリーンのガラスの瓶は鮮やかに透きとおっていた。「くっ！」

ミシェルは激しい怒りを覚えた。

彼は酒瓶を強く握り絞めると思い切り振りかざした。だが、その時だった、ふいに美希子の顔が浮かんだ……ような気がしたのである。それはあまりにも突然のことだった。ミシェルは振りかざした手を止めることはできなかった。瓶が割れる強烈な音が部屋中に響き渡ったあと彼は崩れ落ちるようにフローリングの上にうなだれ、そのあと血の気が引いていく感覚に意識は遠のいた。

どのくらいの時間が過ぎただろうか。長いこと気を失っていたような気もするが、ほんの数秒のことなのかもしれない。パリンパリンというガラスの破片が床に落ちるような音でミシェルは目を覚ました。しかし、彼は目を覚ましてすぐにまた血の気の引く想いをした。目の前には顔から大量の血を流している美希子の姿があった。彼女は無表情のまま床に座り込んでいた。片方の手は右の目を覆うように押さえ、もう片方の手はガラスの破片を拾っていた。

パリン…パリン……。

まるでその音を楽しんでいるかのように美希子は手を取ったガラスの破片を、集めた破片の上に落としていく。右の頬を押さえている細い指の間から真っ赤な血が流れ出していたが気にかけていない様子だった。着ている白のワンピースも部屋のフローリングも美希子の血に染まっていた。大量の、自分の鮮血を見ながら彼女もまた朦朧とした意識の中にいるようだった。

ミシェルの体に凍りつくような緊張が走った。素足のまま美希子の元に歩み寄ったが、途中、ガラスの破片によって彼の足の裏からも真っ赤な血が流れ出した。しかし、痛みを感じ取れる余裕など、その時のミシェルにはなかった。

「・キ・子」

ミシェルはそっと美希子の背中に触れた。

名前を呼ばれ美希子も我に返った様子で、手を止めた。

美希子は「ああ」と声を漏らしたあと、自分の顔から流血していることに気が付いた。近くにあったティッシュBOXからペーパーを引き抜こうとしたが急に体が震え出し、彼女はペーパーを引き抜くことができずにいた。その状況を見ていたミシェルがすぐにティッシュペーパーを引き抜き、彼女の傷口に当てた。そのあとも彼は何枚も何枚もペーパーを引き抜いて渡した。

「…シェル…ごめんね…」

大量のティッシュペーパーを顔に当てたまま、美希子が先にミシェルに謝った。

それはミシェルにとって意外な展開だった。

「なぜ君が謝っているの？ 僕がやったんだろう？」

明らかに謝るのは自分の方であるのに、なぜに美希子が謝っているのか…。彼はその意味がわからなかった。

「あなた、覚えて…いないの？」

傷口を押さえている美希子の指から力が抜けていく。

ティッシュペーパーが傷口から離れないよう、美希子の手の上にそっと自分の手を置いて、ミシェルは黙って頷いた。「ごめん。何も覚えていない」

ミシェルが答えたあと美希子はこの一連の出来事を整理するかのようになり、少しのあいだ無言になった。ゆっくりとした瞬きを繰り返している。

「何度か、あなたの名前を呼んだのよ。だけど返事がなかったものだから明かりを消し忘れて眠ってしまったのかと思って、ノックをしないでドアを…。ごめんなさいね」

「それで？」

「それで？ って…あなたそれで気分を悪くしてウイスキーの瓶を…私に…」

「……」

ミシェルに言葉はなかった。

美希子は、ミシェルが部屋に閉じこもっている時は、カンバスに向かっているのかも知れないと思い、なるべく彼の部屋に近づかないようにしてきた。だが、今回はなぜか声をかけてしまったのである。

「…エル…違うの？」

美希子の声が遠ざかっていく。彼は自分の頭の整理をつけることで精一杯だった。

美希子が部屋を訪れたからといって気分を悪くするなどあるはずがなかった。ミシエルの頭の中は別のことでいっぱいだった。あの時僕は…と考える度、気分が悪くなった。だが、頭の中の^{もや}靄は徐々に晴れていき数分前の記憶が思い出されていった。

（あの時僕は、震える自分の手を見て無性に苛立っていた。それからドアの方を目掛けて酒瓶を投げつけた。酒瓶はドアのすぐ脇の壁にぶつかった。大きな音を立てて派手に割れた。それから、それから…）

それでも、ミシエルは瓶が割れた強烈な音を聞いたあとの、一番肝心な場面は空白のままだった。「私がドアを開けた時、あなた急に床に座り込んで……動かなくなったのよ」

「……」

今の美希子の話に、何てことだ、と彼は思った。壁に酒瓶を投げつけた時に浮かんで見えた美希子の顔は幻覚ではなく、本人の彼女がそこに立っていたということなのだ。

今までにミシエルが壁に酒瓶を投げつけることなど一度もなかった。ドアをロックせずに美希子がミシエルの部屋を開けたことも、夜中に部屋の明かりがついていたことでそれを理由に美希子が部屋を訪ねてきたこともなかった。全てにおいて初めてのことだった。その初めてのことがひとつでも行われていなければこんなことにはならなかったのだ。どれかひとつでも…。ミシエルは心底そう思ったが、しかし、何をどう考えても目の前には顔から血を流してうずくまっている美希子の姿があった。それが何物にも変えられない現実だった。

「何て・ことだ」

ミシエルは美希子の前で膝を落とし、床に手を付いたまましばらく絶句した。

ほんの数秒、時間をずらして彼女がドアを開けてくれていたならと、そんな考えがまた頭を過ぎる。しかし、美希子は一秒のくるいも一瞬の迷いもなく彼の部屋の扉を開けていたのだった。

瞬きひとつ出来ないでいるミシエルの目にキラリとまた光の線が入り込んだ。部屋の明かりに反射し、大小さまざまなガラスの破片は宝石のような輝きを放っていた。鋭く割れたガラスの刃先からは、幾通りもの美しい光が線になってミシエルの瞳を刺激した。

ミシエルは呆然とその光を見つめていた。その時彼はこんなことを思った。

（人を傷つけたこの凶器が、なぜにこんなに輝いているのだろうか…）

＊

＊

その頃、物音ひとつしない真夜中の刻に、ミシエルの家で怪我人が出ていることなどローザは夢にも思っていない。彼女もまたその夜は眠れず窓辺に佇んでいた。そして、今日の朝方に聞いたミシエルの話をひとつひとつ思い出していた。

彼はマウイ島に来る前は日本で暮らしていた。

彼は三十二歳。結婚はしていない。

彼の両親は、彼が生まれて間もなく離婚した。父親の顔は知らない。

彼の母親は自ら命を絶って他界した。

彼はマウイの別荘で同じ歳のミキコという名前の、日本人女性と暮らしている。

彼は眠ることが出来ず体をアルコール漬けにしている。

眠っている間にミキコが消えてしまいそうで、怖いと言った。

ミキコは彼の親友の恋人だった。

ミキコを苦しめながらも手離すことができずにいる。

ミキコは泣くことも怒ることもなく、ただ静かに彼の傍にいうという。

そして、「やっとあなたを見つけ出した」それが初めてミキコを見た時のミシエルの想いである。

第4章に続く